

うルビを打って用いることにしました。」

とにかく、イエスの十字架の贖罪死によって私の（人間の）罪が赦されたという出来事が意味するその本質は、再度言うが、自分の存在の根拠が自分にあるのではなく、自分を越えた大いなる命による、ということの証示にあると言えます。それは自分で自分の生を支えねば、自分の生は成り立たないと思ひ込んでいる、誤った自己主張の生き方、即ち罪の「放棄と克服」へ導くことが十字架の贖罪の「方便^{しるし}」としての出来事の本質なのです。

自分の主人は自分である、という歪んだ自我による生き方から自分の存在についての根源的な思い患いが生じて来る。

しかし、イエスはそのような自己中心的な思い患いの生き方に囚われた私たちに、生きる本当の根拠の何であるかを提示することにより、人は根源的に思い患^{わづら}う必要のない者として生かされている者であることを、十字架の死と復活の出来事を含むご自分の生涯を通し具体的に「しるし」として証示されたのです。

次のイエスの提示もその一つです。

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから言うておく、命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも人切だ。鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養っていただく。あてたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばす事ができようか。こんなごく小さな

ことさえできないのに、なぜ、ほかのことまで思い悩むのか。野原の花がどのように育つか考え
てみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく、栄華を極めたソロモン王でさえ、
此の花の一つほどにも着飾っていなかった。今日は野にあつて、明日は炉に投げ込まれる草でさ
え、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄
い者たちよ。あなたがたも、何を食べようか、何を着ようか、何を飲もうかと考えてはならない。
また、思い悩むな。それは皆、世の神を知らない人々が切に求めているものだ。あなたがたの天
の父(神)は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。ただ、神の国(神のご支
配)を求めなさい、そうすれば、これらのものは加えて与えられる。小さき群れよ、恐れるな!
あなたがたの父(神)は喜んで神の国(神のご支配)を下さる。

—ルカによる福音書一二章二二節以下—

ここでイエスが語られること、それは、人は、自分の力や知恵で、この世に立っているのでは
なく、人間が自分自身について配慮する前に、すでに人は神の大いなる命のたぎりの内に生かさ
れている者であり、これこそが人間の命の真実の姿なのであるということです。そしてその事自
体が、人は神に赦されている、ということ、祝福されているということです。だから「思い悩む
な！」とイエスは言われる。このような自分の存在の真実を知らないままで、食べたり、飲んだ
り、笑ったり、泣いたり、悲しんだり、喜んだり、怒ったりしてはならなりませんぞ！とイエス
はおっしゃる。

生死は神の内にあつて人の計^{はか}らいの内には無い。まさに、「思い悩んだからといって、わずか

でも寿命を延ばすことができようか」です。自分の生死の根拠を自分が持っているのではない。否、持つ必要もないし、持たなくても既に人は生きるようにされている。「空の鳥を見よ！野の花を見よ！今日は野にあつて、明日は炉に投げ込まれる草でさえ神は装つてくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。とイエスは神の支配、即ち創造的な命が、どの人の脚下にもたぎっている、と提示された。

その意味で、イエスが十字架にかかつて私たちの罪の贖いのために死んでくださった「から」、人間は救われたという教義によるのではなく、再度言うが、イエスの全生涯、つまり、十字架の死も復活も含めたその言動すべてに於いて証示されたその本質は、人が自分について計らう以前に、神の大いなる命の内に「生死を越えて生かされている」という事実、この驚くべき、祝福にたぎる熱き真実の命の提示であり、特に十字架と復活の出来事はその最たる具体的な「方便」なのです。

したがって、先に紹介した、アウレンが三つに類型化した十字架理解に共通している本質は、自分の生は自分の計らいによるという自我の放棄と、自我を越えた大いなる命のたぎり(神の支配)に生かされている自己の開眼による歪んだ自我の克服なのです。使徒パウロはこのような人間の新生を、復活のキリストの顕現体験により大いなる命のたぎりを直接に経験することで「復活のキリストに結ばれている人はだれでも、新しく創造された者である。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらすべては神から出る」と歎喜の声をあげ、(コリントⅡ五章一七節以下)さらに、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリスト—大いなる命のたぎり—がわたしの内に生きておられる」と告白した。(ガラテヤ二章二〇節)

とにかく、イエスがその全身で証示し、パウロが最後に到達し、開眼したことは、人が生きていくということは、普通に考えている自分(自我)よりさらに深い生死を越えた命から生かされている、という自己の生の真実だったのです。イエスの十字架の死と復活がもたらす本質はこの一点にあったのです。

贖罪の意味―罪の放棄と克服―(一)

イエスは言われた。「見えなかったのであれば罪はなかったであろう。しかし、今、『私たちは見える』と言う。だから、あなたたちの罪はそのまま留ま^{とど}まっている」

―ヨハネによる福音書九章四一節―

イエスが言う「人間の罪」とは、「人間の欠点や弱さ」のことではありません。正しい規範を守れず、善を行う事が出来ないことを、イエスは「人間の罪」と言われたのではなくありません。

イエスが言う「人間の罪」とは、「私は見える」という「傲慢な在り方」を言うのです。新約聖書に於ける上記に用いられている「見る」というギリシヤ語は「(見透かす・見抜く・本質をつかむ)の意味があり、宗教的な直観的把握、とりわけ神の直観的把握、あるいは、世界の秩序の洞察という意味で用いられている。この点、ヨハネによる福音書においては「見る」行為は、一層根源にまで遡って捉えられている」―ハルツ／GZシュナイダー編「ギリシヤ語新約聖書釈

つまり、「見える」とは、私は何でも分かつている、私は何でも出来る！という私という人間の傲慢。人間には出来ないことはない、という自我高揚、自分の主人は自分であるという生き方、在り方の自己主張です。それは、自分一人で生まれ育って来たかのように、育ててくれた親の存在を全く無視して生きる生き方、在り方と同じような傲慢、つまり、自分は自分によつて自分なのだ！自分の主人は自分である！自分を支える者は自分であるという自己認識です。このような生き方をイエスは、「人間の罪」と言われた。したがって、再度言いますが、道徳的、倫理的な規範どおりに生きられない人間の弱さや欠点を「人間の罪」だと、イエスは言われたではありません。もし、そのような人間の不完全さを「罪」だと言うなら、イエスはただ立派な倫理や道徳を説いた人になってしまいます。

イエスが私たちに示したことは、私たち人間はどういう存在であるかということであつて、生き方の一つ一つの道徳的な善悪の倫理を説いたものではありません。にもかかわらず、キリスト教は、人間の生き方の道徳的な善悪を説く道徳宗教になってしまいました。そして、イエス・キリストの十字架の死を、人のために命を捧げる自己犠牲の愛の証、倫理的に高潔な模範として世間では評価されるようになってしまいました。勿論、それ自体は悪いことではありませんが、イエスが証示した人間の本当の救い、という最も大切な事柄が見失われてしまったように思うのです。

X

X

イエスが証示したことは、私たち人間の生き方の枝や葉のことではなく、生き方の根本、存在の根本、つまり「人間存在の根っこ」です。即ち、人間が生きる根拠、人間存在の究極的な根拠

が何なのか、というその大切な一点を全身これ指と化して証示されたのです。イエスの全生涯、特に十字架の死と復活の出来事は、その一点を証示する最たる方便しんべんだったのです。

人間存在の究極的な根拠をイエスは「神の支配」として提示された。熱烈なユダヤ教徒であるパリサイ宗の人に「神の支配は何時来るのか」と問われたイエスは、次のように答えられた。

神の支配は目に見えるままでは来ない。人々が「見よ、ここだ！」とか「あそこだ！」とか言うこともない。なぜなら見よ！神の支配はあなたたちの（現実）の只中にある。

— ルカによる福音書一七章二〇節 —

「それぞれ！神さまのご支配は、あなたの足元で、あなたの只中で、刻々と創造的な命として躍動してはいませんか。あなたには見えませんか。静かにひとみをこらしてごらんください。謙虚になって耳を澄ましてごらんください。そうすれば、命のたぎりが天地イッパイに響き、地のはてにまで及んでいるのが聞こえてきますよ」と、イエスは言われる。だからこそこの創造的な命に開眼している人の様子を次のように言われた。

なんと幸いなことか。徹底して霊こころの謙虚な人達は。神の支配はその人達のものである。

— マタイによる福音書五章三節 —

本当にそのとおりでと思う。このように思いめぐらして、ふと、花の開落を見て、人の

善悪を言わず” という言葉を思い出した。

×

×

イエスは深く天地を観想し、「天は神の玉座、地は神の足台である」と看破された。(マタイ五・三四)人が、未だどのような知恵も知識も持たず、したがって、どのような判断も行動も、勿論、いかなる宗教に関わる以前に、全ての人は絶対平等に生かされている。此の生の事実が「幸いなるかな」の世界なのです。この一切に先立って躍動する大いなる命、創造的な神の支配、これこそが「恵み」なのであって、この命のたぎりの事実をイエスは「お父さん」と呼び、聖書は「神」と称しているのです。しかしイエスの場合その「お父さん」が何処かに居るのではない。また聖書の場合その「神」が何処かに居るのではない。聖書の思想では「居る・有る」と「成る」とは一如、つまり同時であるということです。「有る」とは「成る」ことであり「生起すること」「生起すること」は「働く」ことであり、未完了的な創造的な働きそのことなのだ。と有賀鉄太郎はその著「キリスト教に於ける存在論の問題」に於いてその研究の成果を記している。

したがって、神とは、対象化されたウルトラスーパーマンとして、天の何処かにこの世の横並びのものの一つとして存在者として居るのではなく、創造的な命のたぎりそのことなのであります。だから「神は霊である」と言われる。(ヨハネ四・二四)と同時に「神は創造的な力」なのであって、その見えざる力ある働きに於いてその栄光をあらわされるのです。イエスは「わたしが神の内におり、神がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい」(ヨハネ一四・一一)と言われた。神は働きや業に於いてその命をあらわされる。しかし、それは「方便しよさ」であって、神それ自体ではないということ

をしつかりとおさえておくべきです。なぜなら、働きや業その事に直接神を見ると、「パン」を食べて満足し、そのパンを求めてイエスを追い回す者になりかねないからです。この世に現れ出した働きや業は創造的な命のたぎりとして、一切に先立って躍動する根源的な神の命の「方便」であることを忘れてはなりません。

X

X

イエスの言動のすべては、ただ一つのことを提示している「しるし」です。そのただ一つのこととは、神と人との根源的な関係です。つまり、人が自分の努力や配慮で自分を支え立たしめようとす以前にすでに、神によって支え立たしめられているという根源的事実です。だから、イエスは言われる。

二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたの父(神)のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも、一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたはたくさんの雀よりもはるかにまさっている。

——ルカによる福音書一〇章二九節以下——

雀は雀であり、人間は人間であって神ではない。雀も人間も物であり有限な存在です。雀は自分で飛び、人間は主体として自己の生き方を決断して生きています。その意味では、神と人は同じではない。しかし、同じでないままでも根源的にその生の現場で神と直接している。神の支えなくては一時も有ることはできない。時が来て生まれ、時が来て人はこの世から神により去らしめられる神の決定の内に生かされているものである。神と人とのこのような根源的な関係こそが、人間にとって最も大切な事であり、この根源的な存在の秘儀とも言うべき事実、この一つのことだ

けをイエスは十字架の死にいたるまで全身をもって行じ、且つ証示されたのである。次の譬え話も例外ではない。

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に『お父さん、私が頂くことになっていいる財産の分け前を下さい』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こつて、彼は食べることに困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっつて豚の世話させた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物を与える人はだれもいなかった。そこで彼は我に返つて言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどのパンがあるのに、私はここで飢えて死にそうだ。ここをたち、父のところに行つて言おう。』お父さん。私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。彼はそこをたち父親のもとに行つた。ところが、まだ遠くに離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄つて首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れてきて屠りなさい。食べて祝おう。この子は、死んでいたのに生き返り、いなくなつていたのに見つかったから

だ』そして、祝宴が始まった。

—ルカによる福音書一五章一一節以下—

この「放蕩息子の譬え話」は一般に息子が父親のもとへ悔い改めて帰って来る、つまり、「罪人である人間が神のもとへ悔い改めて帰る譬え話」として取り上げられます。しかし、よく見ると、この譬え話は、どれほど人が神から離れていようと、神は絶対に人から離れてはいない、否、離れる事は出来ないのだということを証示しているのだと言えます。自分自身に対する配慮に先立って、人はすでに生かされているのである、ということ。その意味で、この譬え話は息子が「本当の自己を発見した話」であるといえます。息子は自分の計画や努力や願いや価値観等の一切を失ったとき、それらに先立って、それらを支えている本当の白「神と共に立っている真実の自己」に開眼したのです。この白覚に立つとき、「思い悩むな」と言うイエスの言葉の深さが見えて来ます。再度言うが、息子（人）が父（神）を忘れ、父との関係を切つても、その実、父（神）との関係は少しもきれてはいない。ということ、人間がどれほど迷つても神のもとにあるということ、そして、父は語らず言わずとも息子に、人間に語りかけ、「まっとうな息子」へ立ち返らそうとしている。この神と人間との根源的な関係の「しるし」がイエスの十字架の贖罪の中身なのです。その意味で、イエスが十字架にかかった「から」人が救われたのではなく、その出来事を贖罪（身代わり）と解釈することで、始めから神によつて人は生かされているという、その根源的な自己の存在の事実には開眼する。そのとき、自分について思い煩う自分（自我）を放棄させられ、本来の自己へと克服開眼せしめられるのです。その「方便」が贖罪信仰なのであります。

自我よりも深い神に生かされている眞実の自己への開眼は、生死を越えた永遠の自由と平安、そして、今、生きていることへの畏敬の念をどの人にも与えるのである。

放蕩息子は、この無始無終、不増不減の親の愛に開眼した。それは、本当の息子として自分自身の見えであり、生きる喜びへの目覚めであった。

贖罪の意味―罪の放棄と克服―(二)

イエスの宣教の中心は「神の国(天の国)」です。「神の国」とは何か。

イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、あらゆる種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作るほど大きな枝を張る」

―マルコによる福音書四章三十節以下―

聖書に於ける「神の国」について、古来いろいろ解釈され、議論されて来ました。詳しいことは専門書をお読みになればよいのですが、一般的に未だに少し誤解されているようです。

神の国、と言うと、そういう場所があるように思ってしまう。しかし、イエスの場合「神の国」とは「神の支配」または「神の統治」という意味であって、それは「神の命のたぎりその

事」だと言えます。「命のたぎり」とは創造的な命の躍動その事にほかなりません。ですから、「神の国はいつ来るのか」と問われたイエスは次のように答えられた。

「神の支配は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものではない。実に、神の国はあなたがたの中にたぎっているのだ」

— ルカによる福音書一七章二〇節以下 —

イエスの答えは実に明解です。神の支配は今、あなたをあなたたらしめている創造的な命のたぎりとして、あなたの中で躍動している、と言われた。ですからイエスは、神の国は見える形として何処かに固定的に在るものではなく、また、理想の場所として来るものでもない。勿論善人たちだけが行く夢のような極楽の場所でもない。それらは所詮、人間が願望や憧憬として作りだす幻想の世界です。つまり、神の国は人間の観念の世界を超越した創造的な命のたぎりの世界なのです。つまり、それは言語化できない働き、形化かたちか出来ない働きである故に、イエスは神の国を証示するのに「何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか」と苦心なされた。そして結局、先に紹介した「からし種の成長」の姿、即ち、地上で最も小さな種が地に蒔かれると、驚異的に成長し、その葉の陰に空の鳥が巢を作れるほど大きな枝を張るようになる、その創造的な命のたぎりとしての「働き」又は「力」として証示なさったのです。

この創造的な命のたぎりは、必ず万物を万物たらしめ、そのものをそのものたらしめ、人を人たらしめる根源的な力、また、命として、万物の脚下でたぎりつづけている、まぎれもなく現在

的な出来事なのだといエスは言われる。

×

神の支配はすべて存在するものの根源的な命その事なのです。世界があり、わたしが存在するということの根拠は、わたしの一切の努力や配慮によるのでなく、それを超越しつつ、同時に私を私たらしめている創造的な命のたぎりであるとイエスは言われる。そして創造的な命のたぎりは創造に於ける定めとしての自然なのです。そのことをルカによる福音書は次のように記しています。

×

またイエスは言われた。「神の支配は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに（自然に）実を結ばせるのであり、先ず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速鎌を入れる。収穫の時がきたからである。

—マルコによる福音書四章二六節以下—

この、「神の支配」についてのたとえは、多くのことを証示しています。

神の創造的な命のたぎりは、先にも述べたとおり、人間の側の一切の努力、配慮、分別を越えているということです。つまり、神の支配はそれ自身で命を創造貫徹する働きなのです。その出来事をイエスは「人が夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそのようになるのか、その人は知らない。土はひとりでに（自然に）実を結ばせるのである」と言われた。

私が存在している、という出来事の本当のところは、私を越えた神の創造的な命のたぎりに根拠があるのであって、決して、私の努力や配慮(自我)によるのではない。

しかも、神の支配、即ち、神の創造的な命のたぎりにには、自然という定めが隠されている。「芽を出した種の命は、ひとりでに、まず茎、次に穂、そして穂には豊かな実が出来る」とイエスは言われる。しかも、隠された順序は、「非連続の連続」としてあるのです。種を大地に蒔き、やがてそれが実り収穫するまでの種の成長の営みは確かに連続しています。しかし、種は種、芽は芽、茎は茎、実は実なのです。つまり、種は百パーセント種を生き、芽は百パーセント芽を生き、茎は百パーセント茎を生き、実は百パーセント実を生きているのです。言い換えると、それぞれがそれぞれの場でそれ自身として即ち「個」として百パーセント存在しているのです。その意味でその個々の命の営みは独立しており互いの関わりは非連続なのです。しかし、その個々の命の営みを営みたらしめて個を超えた根源的な命(超個・神の支配)は一であり、その命から個々の命を観るときそれらの命は連続しているのです。とすると、個々の命の現れは個を超えた命が露あらかわになった出来事であると言えます。正に神の支配の現場は、「一即多」としての創造的な命のたぎりなのです。ついでながら、個がこの世の相対的存在であるなら個を超えた根源的な命(超個)は絶対であり、したがって神の支配は「一即多」と同じく、「相対即絶対」としての創造的な命のたぎりとして表出すると言えましょう。表現がすこし堅くなつてしまいましたが、要するに、この世があり、人や物があるということは、それ自体で有るようで、その実、それらの個をそれとしてあらしむる根拠は神の支配、つまり神の創造的な命が露あらかわになる働きの表出であるという事です。その事を聖書は「神による創造」と言うのですから現実には物事が存在するという

ことは、「在る」というだけではなく、それは「成る」ということであると旧約聖書の創造論は、「存在」の神秘を証示していると言えます。例えば、旧約聖書の冒頭の言葉は「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であつて、闇が深淵の面に有り、神の靈風が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ！」こうして、光があつた。

—創世記一章一節以下—

この世界に生み出された「光」は相対的な「個」であり、この世に属するものとしての定めのもとに成っているものです。しかし、それは神の創造の業としての栄光を担っているという意味で、根拠としての神の命のたぎりが露あつちになつた働きでもあるのです。即ち先述のとおりそれは「絶対即相対的」なのです。（関根正雄は「創造とは、神賛美、秩序付け、唯一の神の初めにおける絶対的な業です」と『創世時代講解』で述べている。関根正雄著作集二三卷一七頁）

このような「一即多、相対即絶対」在ると成るとが一如の神の支配による創造の自然あつちが露あつちになつた存在の様態の世界を神話的に表現したのが、旧約聖書に描かれている「エデン（幸福）の園」です。そして、旧約聖書は冒頭で「神による創造」を「初めに、神は天地を創造された」と厳かに語っています。この言葉は存在の根拠が存在者（人間）の計らい先んじて、決定されている「神の創造に於ける自然」であることの宣言なのです。

「神はお造りになつたすべてのものをご覧になつた。見よ、それは極めて良かった」と創世記は記しています。（一・三二）「良かった」とは、「目的にかなつている」ということです。それは言うならば「創造に於ける自然である」ということです。

ここで言う「自然」について確認しておきたいと思えます。一般的に「自然」と言う場合、自己に対する客体的・対象的なもの即ち、自然科学の対象としての自然、または科学技術の資源としての自然を指しているようです。このような自然についての理解のしかたはおよそ西洋的なものであつて、特にヨーロッパに於ける一七世紀の思潮として生まれてきたものです。それは、それ自体で存在する機械的、合理主義的、自己完結なものが自然と見なされたのです。その結果、自然から法則を見出し、見出した法則に従つてものごとを構成することを技術と言ひ、その技術を駆使して技術文明を生み出したのが近代という時代です。私たちはその技術文明によつてさまざまな恩恵を受けて便利で快適な生活をしています。しかし、本来の自然はそこにはありません。自然とは自己に対して対象化し客体化してそれ自体を人間が資源となし、あるいは自我の欲求を満たすための消費物ではありません。しかし、このような誤つた自然観が、人類又は地球存亡の危機をもたらしています。

本来の自然とは、「自(おのずから)然(しからしめる)創造に於ける命のたぎりなのです。このことはフュシスというギリシヤ語が意味する「みずから自身により生まれ出る」という自然の根源的な在り方と同じであるといえます。そのような自然は、人間が合理的に定義出来る事ではなく、いっさいに先立つてある根源的な命のたぎりその事なのです。その命のたぎり、この世に現成すること、これを「創造」と言うのです。ですから、聖書の創世記は創造された世界を見て、「見よ、それは極めて良かつた(創造の目的になつてゐる)」と記しています。それは自然としての命のたぎりになつてゐるという意味です。ちなみに、日本人にとつて自然とは「自然」というものを客体的総称名詞として立てて花鳥山水をその中に一括するかわりに、自然のひとつ

まひとこまを、いわば自己の主観的情態性の面に反映させて、「自然さ」という情感に於いてみずからのところでそれを感じとつてきた」と木村敏氏は言う。それは、イエスが野に咲く花や空を飛ぶ鳥の姿の奥に、それを自おのずからそのように然しからしめている創造的な命のたぎりを見ておられたのと一面で通じるものがあるといえましよう。つまり日本人はその「自然さ」を「あるがまま」とし、そこにものごとの本来性を見て大切にしてきたのではないかと思ひます。その意味で「不自然」とは本来的な物事の道理（自然さ）から外れて、我がによる理屈で物事に対し無理に自我を立てようとする「ぎこちなさ」「わざとらしさ」の在り方をいふのです。まさに、「律法主義的在り方」を思い起こします。

贖罪の意味―罪の放棄と克服―(三)

「人間とは素晴らしい者だ」ということをイエスは教えてくださつた。

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養つてくださる。あなたがたは彼らよりはるかに優れている。……今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装つてくださる。ましてや、あなたがたをもつと多く装つてくださらないことがあるうか。

―マタイによる福音書六章二六節以下―

つまり、人間は、他のものより優れた者として神に創造されている、というのです。しかし、優れた者とは、その役割のことであつて、存在自体が優れているというのではない。人間も他のものと同じ被造物として、神の決定の元で、その役割を担って生きる。この世のもの“の一つにしかすぎない”。

彼造物であるこの世の物は、それぞれに役割を担って生きるようにされている。それは、それ自身でありながら同時に、他との関わりに於いてそのものとして在らしめられることで、全体の安定を保てるように決定されている。例えば、一輪の花が咲いていることはそれ自体の存在であるが、同時に、大地や水や太陽や空気、それに昆虫などとの関わりに於いてその花であり得ることで全体のバランスを絶妙に保っている。同じようにこの世のすべてのものは、他のものから与えられ、同時に与える関係において、それ自体であり得ることで全体を保っている。その様態は人間の身体の働きから宇宙における天体の運行にまで及ぶ、神の決定なのです。

例えば、私たちの身体には様々な部分があり、その一つ一つはそれ自身のために在るのではなく、他の部分との関わりにおいてそれでありうるのです。胃という臓器は口があり、歯があり、食道があつて胃なのです。また腸という臓器があつて胃としての機能が果たせるのであり、さらに身体の全ての生理的な部分の働きとの関わりにおいて、胃として機能するのです。もし、胃というものが独立にあるとするなら、それは胃ではなく、かつて或る人の身体の臓器の一部として胃と称されていた物にすぎない”と言えます。

体の各部分を寄せ集めれば、その人の身体になるのではない。身体の部分は、身体全体との関

わりにおいて身体として機能する事ができるのです。この様態は宇宙全体においても同じだと科学は教えています。たとえば、地球上の物の運動は宇宙全体に在る天体の質量との関わりにおいて起こるのだと科学は証明している。宇宙を含むこの世のものは相補性に於いて命のたぎりとして全体を保っている。つまり、そうあるから、すべての個が全体として安定調和ならしめられる。その働きの様態を「神による創造に於ける自然」または「創造的な命のたぎり」というのです。イエスはその命を「お父さん」と言われた。パウロは、人間の本来的な在り方つまり「創造に於ける人間の自然」がこの世に形として現成したそれを「教会チルチヤ」と言った。

体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が「わたしは手でないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が「わたしは目でないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が「わたしは目であるから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし全体が目だったら、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし全体が目だったら、どこで聞きますか。もし、全体が耳だったら、何処でおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに体に一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるのでしょうか。だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かつて「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かつて「お前は要らない」とも言えません。それどころか体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。わたしたちは、体の中でほかより恰好がわるいと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとします。見栄えのよい部分

には、そうする必要はありません。神は見劣りする部分をいつそう引き立たせて、体を組み立てられました。それは分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリスト(大いなる命)の体であり、また、一人一人はその部分なのです。

—コリントの信徒への手紙Ⅰ—二章一二節以下—

このように、この世のものはすべて、他のものとの関係において相補性を担ってそれ自身でありうるように神に決定されているのです。再度言うが、これが「神の創造に於ける自然」なのであります。このように、創造における自然としての定めは人間の一切の計らいに先立ってある事実であり、秘儀なのです。まさに、言葉の厳密な意味に於いて「不可思議」な超越的な「神の支配」。「神の栄光」その事なのです。したがって、この創造に於ける自然(命)をそのまま自己の主体として生きingことを「神の栄光をあらわす」と言うのです。旧約聖書の信仰人は「創造に於ける自然(命)の息づかい」が無音の音として天地に満ちていることを悟り、次のように詩いました。

もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はその御手の業を示す。その日、言葉をかの日につたえ、この夜、知識をかの夜に送る。語らず言わず、その声きこえざるに、その響きは全地にあまねく、その言葉は地のはてにまでおよぶ。

—詩編一九篇—

イエスもその神の息づかいを、野に咲く花、空に飛ぶ鳥、そして、人が生きる根柢に観て、

「思い悩むな」と教えられた。(マタイ六・二五以下)

X

X

人間は「神にかたどつて造られた者」だと旧約聖書創世記は記しています。「神にかたどつて創られた者」ということが「神に対向して創られた者」(カール・バルト)とするなら、それは神の支配の決定のもとで自覚的に生きる者であるということです。ですから、他の被造物との差異は、それを自覚しているか否かというだけのことであつて、人間も創造に於ける自然の相補性に生きるものと言う意味では決して特別な存在ではありません。しかし、その人間に与えられた「自覚の役割」即ち、「自覚的存在である」という役割は他の被造物に比して特別な役割であり、優れているといえます。ここに「人間らしさ」があり、「人間の本来性」があるのです。このよ
うな人間の在り方は「神の創造に於ける(人間の自然)」なのです。その世界を神話的に描いたのが創世記に記されてある「エデン(幸福)の園」であることは先にも述べたとおりです。しかし、その「エデンの園」を崩壊に導いたのはアダムとエバ、つまり人間であると創世神話は記して
います。(創世記二章四節～三章二三節)

エデンの園を崩壊に導いたのは結局、人間の自我高揚によると言えます。それは人間の「思い
上がり^{イグム}」のことです。人間に与えられている役割、それは人間の限度でもありますが、その役割
を逸脱して、自我の努力によつてすべてを完成出来る、完成しようとする思い上がり、つまり自
我高揚の在り方こそが「エデン(幸福)の園」を崩壊に導いた原因だったのである。それは、人間中
心主義をこの世にもたらし、その結果、人間同志の利潤追求によるさまざまな凄惨な争い、自然
破壊、生態系の破壊、環境破壊、人間自身の存在の危機を生み出すことになったのです。その意

味で創世記の創世神話は世界の在り方、人間の在り方の本来性について大切な示唆を現代に与えているといえましょう。

それにしても、使徒パウロは人間の自我高揚、即ち歪んだ自我の姿を次のように指摘しました。

正しい者はいない。一人もない。悟る者もなく、神を探し求める者もない。皆迷い、だれもかれも役にたたない者となった。

善を行う者はいない。ただの一人もない。彼らのどは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には腹の毒がある。口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲惨がある。彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない。

—ローマの信徒への手紙三章一〇節以下—

×

×

自我高揚とは、自我が自我によって自我を立てようとする事。つまり、自分の主人は自我であり、自我を自分の生きる根拠となし、自我によって全てを完成しようとする在り方のことです。自我による生き方は、単なる利己的な生き方というだけではなく、この世からこの世を覗る在り方”のことです。ということは、この世を越えた神の世界も、宗教も信仰も、救いも、聖書も自我高揚、自我貫徹の道具にしてしまう。現世的な論理や観念で自我の内に抱え込む在り方であって、その価値観は徹底して現世的な自我中心なのです。つまり、自我が究極の主体だとする生き方です。このような人間の在り方はますます創造に於ける人間の自然性から、人間を逸脱せしめ、人間らしさ、人間の役割、人間の本来的な在り方を失わせてしまうことになったのです。

このような人間の^{まことはず}的外れの在り方、生き方、考え方を聖書は「罪」(的外れ)といふのです。

イエスもパウロも結局は、当時のユダヤ教の「律法を守ることで本来の人間になることが出来る」という自我高揚による律法主義の在り方の根本的な誤りを指摘し、そこから本来の自我へと解放されることを提示したのです。その意味で原始教団の人々が、イエスの十字架の死を、人間の罪のための贖罪死であり、その出来事によつて罪が赦されたと理解したその本質は、もはや自我を根拠として自我高揚をする必要はなく、自我より深い大いなる命の営み(キリスト)に生かされる自分への開眼だったのです。そのことを使徒パウロはイエスの十字架の死と復活において直接経験した。そのとき、彼は自分の信仰的実存を「もはや、われ、生きるに非ず、復活の命(キリスト)がわが内に生きている」と歓喜したのです。その意味は、「今やイエスの十字架と復活の出来事に接して、私が霊的に開眼したその本質は、私の自我の働きが、私を生かす主体だと思つていたが、私を生かす本当の主体は自我より深い大いなる命の働きによるのです。その意味で、私が生きていくということは、大いなる復活の命(キリスト)が生きているということなのです」といふ事です。ですから事実「生きるはキリスト(大いなる復活の命)です。」とパウロは言ひ切りました。(フィリピ二・一二)

先に、イエス・キリストの贖罪信仰は、罪の放棄と克服との方便^{しるし}である、と申しましたが、それは、イエスが十字架に架かったから人間の罪は赦されたという、出来事唯一絶対主義になるとき、他のどのような教えも出来事も、人間を救い得ない偽りの教えだ、ということになります。歴史的な一つの出来事を絶対化することは、この世的な出来事を偶像化することにほかなりません。この世のどのような事も、現れては消えてゆく霧にしかすぎない相対的な事柄です。しかし、

この世に於ける出来事はすべて“しるし”です。その出来事が秘め、証示する命の真実に靈的な眼力で開眼したいものです。「言わず語らず、その声は聞こえないのに、その響きは全地にあまねき、地のはてにまで及ぶ。」まさに「耳ある者は聞くべし。目ある者は見るべし！」です。

あとがき

この冊子は、左京教会で毎月出していた私の個人誌「みちしるべ」に二〇〇二年二月より二〇〇六年二月まで「宗教と人生」と題して記した文章を纏めたものです。そこで読者と一緒に考えたいと願ったことは、イエスが提示した「宗教信仰」を現代状況の中で、見つめなおすことによつて、人間が人間らしく生きる命に、一人ひとりが気づかせていただくことでした。

新約聖書にあるイエスの言葉は、私が「有る」という、有ることの有りのままを、誰もが納得するかたちで証示して下さっていると私は受けとめています。なぜなら、イエスはつまるところ「天然自然」を示されたからです。次のイエスの言葉もその一つです。

人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしてゐるうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに（天然自然に）実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実が出来る。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時がきたからである。（マルコ四・二六以下）

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養つてくださる。（マタイ六・二六以下）

天の父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らしてくださる。（マタイ五・四五）

このイエスの語りは、なんと清々しく明解なことであろうか。

イエスの言葉をこのように受け取ると、正統的なキリスト教の教義の枠に固執するキリスト者の方々は「それは自然神学ですよ！そのような解釈は汎神論的ですね！聖書的・福音的ではありません！」と一笑して省みない。

しかし、これらのイエスの言葉が証し示している命の世界は、人間の観念が生み出す真理を全く超越した「有る」という有りのままの根源的な命のたぎりそのものとしての神秘です。そこでは、「汎神論だ！自然神学だ！聖書的でない！」と叫ぶ人間の観念の一切が無化されている。なぜなら、その命のいとなみは、人間の計らいの枠を超えた命の事実だからです。ちなみに、「神秘」とは、ギリシャ語においては「目や口を閉じることの意味し、目を閉じることによって観察の対象は消え、主観と客観の区別が成立する以前の、それに先立つ次元が現れる。それに触れる事が神秘の体験である。またそれは言語で伝えることも出来ないから、人間は口を閉じるほかにい」と小田垣雅也は言う。要するに、その働きをイエスは「神の支配」と言い、使徒パウロは「復活のキリスト」に見た。（八木誠一）そして滝沢克己は「インマヌエルの原事実」と呼び、久松真一は「無相の自己」と言うが、他にも「超個の個」や「絶対矛盾的自己同一」即非の論理など、それぞれにその神秘を霊的な直接経験において開眼した方達の言表はさまざまである。私の場合には「創造的な大いなる命のたぎり、創造に於ける自然」と言表す。釈尊が「法」と言ったのはこの創造における自然、または、大いなる命のたぎりのことではないかと思う。

どの人も、胸に一物、背に荷物、いろいろな重荷を背負って日々生きています。だれもこの人

生の現場から逃れることはできません。また、逃れられる手だてはこの世のどこにもありません。もし逃れられる何かがあると思うなら、それは、更なる人生の重荷を背負い込むことになるでしょう。

このような人生だからこそ、人はますます利己的（エゴイスト）になるのです。しかし、その結果は虚無（ニヒリズム）に陥るだけです。人は一時の露のようにこの世から虚しく消えて行く。この人間存在の利己性と虚無性を「克服させる命」これこそイエスが証示する福音なのです。「克服させる命」とは、人生に於ける苦しみ悲しみを消し去るものではありません。信仰心が増せば、日常の苦しみ、悲しみ、不幸な出来事が無くなると思うのは幻想です。信仰があろうが無かるうが、痛いものは痛いのです。「宗教と人生」とはそのような関係にあるのです。つまり、宗教は人生に於ける幸福製造の機械ではありません。

人生は重荷を背負って坂道を行くようなものです。それは苦しくて辛い、けれども、私は生きて行ける！生きて行こう！生きて行くのだ！と、自分の人生を引き受ける知恵と力を得ること、それが克服させる命なのです。それは、自分が生きて「有る」という命のありようの神秘に目覚めるということです。まさに「宗教と人生」との関係はここにあるのです。

X

X

「苦しくて辛いけれども、人生はなんと素晴らしく有り難いことであろうか」と気づくこと、それを諦観（ていかん）（はつきりと悟る）と言います。諦観とは人生を諦めて生きることではない。生きる現場の根柢にたぎっている創造的な大いなる命を直接経験することによって、有るものが有ることと目覚めることが信仰なのだと思います。それを天然自然、即ち「天の然らしむこと」を自ら

然らしむ。有り方、それを言い換えれば、与えられた日々を感謝して普通に生きることにほかなりません。

この冊子に記しました事は理屈のことではなく、私が聖書を通してイエスに出会い、素直に頂いた自分が「有る」という事実の知恵の一部です。お読みくださる方とその知恵を少しでも分かち合う事が出来ればありがたいことだと思います。

冊子として纏めてみますと、すこし大きくなりましたので、三分冊に分けて作ることにしました。この冊子を「みちしるべ文庫」に加えてくださり感謝いたします。

なお、最後になりましたが、教友の小野恵子姉がこの度も、印字と校正の奉仕の労を惜しみなくしてくださいました。あらためて深く御礼申し上げます。

二〇〇六年九月一五日

松 下 昌 義